

計り知れない「音楽の力」

3月11日、宮城県沖で発生したマグニチュード9.0の巨大地震は、想像を絶する揺れもさることながら、想定をはるか超える大津波を誘発し、東北地方の太平洋岸に甚大な被害をもたらしました。放送される映像が現実のものであることを即座に認識することができないほどでした。

東北地方に活動の拠点を置くプロオーケストラの一つ、仙台フィルハーモニー管弦楽団は、まさにその地にあり、被災したオーケストラです。津波が押し寄せた気仙沼、石巻、大船渡、七ヶ浜などでもよく演奏をしていました。変わり果てた街の姿は、彼らの胸中を絶望感で満たしてしまっただけでしょう。

来春の春まちコンサートのゲスト宮崎博さんは、このオーケストラの首席第1ヴァイオリン奏者です。安否を心配する私のもとに、「仙台フィルのメンバーとその家族は全員無事」と、彼らの様子を知らせるメールが東京の知人から届いたのは、地震発生から2日後のことでした。ただ、仙台フィルの活動はしばらく休止せざるを得ない状況になってしまったことは言うまでもあり

ません。それでもしばらくして、こんな文章が目に残りました。

— 私たちは、被災者に直接音楽を届けることにより、亡くなられた方々を鎮魂し、ご家族や生活を失くされたみなさんを癒し、そして希望の灯をともすことに全力を挙げていこうと決意いたしました。 —
(仙台フィルハーモニー管弦楽団ウェブサイトより)

こうして、仙台には「音楽の力による復興センター」が設立され、被災地での復興コンサートが始まっています。壊滅した街を蘇らせるためには、様々な支援が必要ですが、何より人の心が立ち直らなければ、復興を推し進めていくことは難しいでしょう。その一助となるのが音楽であるというわけです。仙台のプロ演奏家たちが、自分たちの力をこのような活動に注ぎこもうと考えたこともうなずけます。

音楽が人の心を癒すことは歴史的にも科学的にも証明されています。実際に「音楽療法」という医療分野は、欧米に遅れながらも、この国でも認知されてきました。経済活動が行き詰まると、音楽は「娯楽」として真っ先に切り捨てられるきらいがありますが、こんな時代だからこそ、音楽の力の見せ所ではないでしょうか。

戦後、シベリアの捕虜収容所で、捕虜により結成された寄せ集めの音楽団が、収容所慰問のために演奏したという記録が残っています。演奏会に集まった捕虜たちは、一人残らず明日さえ迎えられるかどうかも分からない者たちばかりでしたが、彼らは皆、涙を流しながら声をあげて日本の歌を歌い、「もう一度生きて帰ろう」という灯を彼らの心にともしたのです。この実話は、「シベリアのトランペット～もう一つの抑留物語（岡本嗣郎著、集英社刊）」に詳しく語られています。

みなさんも、音楽を聞いたり演奏したりして、勇気づけられたり涙を流したりしたことはありませんか。音楽の力は、私達が計り知ることのできないほど大きなものなのかもしれません。

東日本大震災で被害にあわれた皆様にお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた多くの方々のご冥福を心よりお祈りいたします。そして、一日も早い被災地の復興を願ってやみません。